

「教科担任制」の中学校だからこそ 全校一斉で取り組みを推進

子どもたちが自ら学級づくりを企画する、新たな学級経営システム「学級力向上プロジェクト」(開発者・早稲田大学教職大学院教授田中博之先生)。いじめがない、安心できる学級づくりに向けて、実践する学校も増えていきます。6回目の今回は、生徒の主体性をはぐくむことを目的に、学級力向上プロジェクトを推進する名取市立第二中学校の取り組みをご紹介します。

どの教員が実施しても成果が出る

名取市立第二中学校では、2018年度からすべての学年で学級力向上プロジェクトを進めています。導入を決定した遠藤浩校長先生は次のように語ります。「変化の激しいこれからの時代を生き抜くためには、自分たちで課題を見つけて、解決する力が求められる。そのためにも、生徒の『主体性』の育成は必須です。その一環として、学級力向上プロジェクトを導入することにしました」

遠藤校長先生が学級力向上プロジェクトに出合ったのは、利府町立利府第三小学校の校長を務めていた6年前のことでした。開発者の田中博之先生の講演を聞いたのがきっかけです。その後、問題行動の多かったクラスで実施したところ、学級全体が落ち着きを取り戻すなど、大きな成果がありました。

の評価を行うとともに、リーダーチャートの記録などを参考に、学級のよいところや課題などについて、シートに記述していきます。こうした取り組みの効果もあり、昨年11月16日に開催された研究大会では、生徒主体の公開授業が参加者から高く評価されるなど、予想以上の結果を得ることができました。

もっと生徒の主体性を伸ばしたい

プロジェクトを全校で実施してまだ日が浅いものの、さまざまな有効性が表れています。その一つが、教員の指導の改善による、生徒の自己肯定感の向上です。

「以前は、『言われたとおりにやりなさい』という上意下達の指導法が主流でしたが、プロジェクトの推進を契機に、生徒の意見や考えを認め、尊重するように改めたところ、それが生徒の自信を生み、自己肯定感の向上にもつながっています」

「独自に学級会活動を工夫して、学級経営の改善につながる教員もいますが、『あの先生だからうまくいく』と特別視され、全体に波及しないことが多いです。でも、学級力向上プロジェクトは、方法論が明確で取り組みやすいことに加え、個人的資質とは関係なく、どの教員が実施しても同様の成果が得られる。そこにメリツトを感じました」



遠藤 浩校長先生

プロジェクトを校内研究の柱に

ただし、3年前(2016年度)に名取市立第二中学校の校長に就任した際には、中学校での実践に難しさを感じたといいます。「小学校は学級担任制のため、担任の工夫次第で取り組みの時間を確保できます。しかし、中学校は教科担任制のため、いくら教員が熱意を持って、体制が整わなければなかなか計画的に取り組むことができません。そこが課題でした」

そうした事情もあり、はじめの2年間は有志の教員による実践、単学年での実践にとどまっていたのが、2018年度の「宮城県中学校特別活動研究大も手応えを感じています。『スマイルタイムでは4人1組の班(『学習チーム』)を単位にディスカッションを行います。これがとても機能しています。このような少人数での話し合いは、アクティブ・ラーニングの基盤でもありますから、当校では通常の授業でも学習チームでのディスカッションを充実に行っているところです。ほかに、体調不良を理由に保健室を利用したり、問題行動を起こす生徒も激減しました。プロジェクトの実施により、クラスの間関係が改善した結果と受け止めています」

今後も、学級力向上プロジェクトを継続しながら、さらに生徒の主体性の育成に力を入れたいと遠藤校長先生。「教員の指導法が改善されたとはいえ、まだ発展途上。一般的に教員は、教科指導も学級の問題も自ら抱え込んでしまう傾向がありますが、もっと生徒に任せるところは任せ、生徒同士の話し合い活動を多用すれば、より学級経営はうまくいくし、学力向上にも結び付くと思います」



学級経営案

年 組 担任	学級経営案
1 年 組 担任	1 経営方針(担任の願い・学校教育目標及び学年目標を踏まえて)
2 年 組 担任	2 学級目標(生徒の成長を定めて)
3 年 組 担任	3 目指すための重点努力事項
4 年 組 担任	(1) 達成力
5 年 組 担任	(2) 自律力
6 年 組 担任	(3) 対話力
7 年 組 担任	(4) 協働力
8 年 組 担任	(5) 安心力
9 年 組 担任	(6) 規律力
10 年 組 担任	学習の振り返り
11 年 組 担任	学習の振り返り
12 年 組 担任	学習の振り返り

「研究大会で発表しないクラスを含めて、すべてのクラスで研究授業を実施した後、各教員が課題を持ち寄って、ディスカッションを行い、ノウハウの共有を図りました」

加えて、学期が終わるたびに学級経営を振り返る時間を確保しました。その際に用いたのが学級経営案です。教員はそれぞれ、学級力向上プロジェクトの6つ視点から、学期ごとに設定した重点項目

「会」において、同校で学級力向上プロジェクトをテーマに公開授業を行うことが決まったのを契機に、今年度から全学年で本格導入することになりました。その際に、当初の課題解決の方法として取り組んだのが、年間スケジュールへの落とし込みです(左頁参照)。学級力向上プロジェクトを校内研究の柱に位置付けるとともに、どのタイミングで何回スマイルタイム(話し合い)を実施するか、全校的に統一することで、教員は見通しを持ってプロジェクトを進められるようになりました。

「年間行事には、駅伝大会、合唱コンクールなど、学級対抗のイベントもあります。結果として勝敗がつくものの、目的はあくまでも『よりよい学級集団づくり』につながることに。そのように行事のとらえ直しを行いながら、各行事を生かす形でプロジェクトを進めました」